

イチゴ「麗紅」のビニル被覆時期試験

大友 詔次郎

(福島県園芸試験場)

Experiment on Covering Date with Vinyl Film in Culture of Strawberry 'Reiko'

Shōjirō ŌTOMO

(Fukushima Horticultural Experiment Station)

は し が き

麗紅は福島県内では53年度にかなり導入され評価はさまざまであるが、米年度も継続栽培されるもようである。

麗紅の栽培法については導入間もないため確立していない面があるが、とくに宝交早生より休眠が浅く草勢がおう勢なのでビニル被覆時期の把握が重要である。千葉農試の成績では11月中旬に休眠が最も深くなるが、しかしこの時期の被覆でも収量はかなり多く12月中旬まで被覆適期は幅が広いことがわかった。ここでは53年度に当場で検討した10月被覆作型(無休眠促成栽培—無電照, 無冷蔵, 無加温)および11月被覆作型(半促成栽培)における被覆時期試験の結果を報告する。

1. 10月被覆作型

試験方法 : 53年7月25日に子苗を仮植し, 8月29日と9月5日の2回に定植した。ビニル被覆は10月11日, 20日, 30日の3回に行なった。4.5 m間口, 奥行27 mのパイプハウスを用い, このハウスを3等分して3回の被覆時期に当て, また被覆後は各被覆間の仕切りはせず同一の温度管理とした。2条植え, 株間18cmとした。保温は二重カーテン+小トンネル(11月1日~3月25日)によった。

試験結果

生育 : 苗の大きさは, 定植直前の降雨のために9月5日定植苗は苗重が36.0gと大きくなり, 8月29日定植苗(苗重16.0g)との差が大きかった。ビニル被覆後の生育は各区ともわい化の様子がみられた。被覆時期がおそい方が株張り, 葉柄長, 葉の大きさは小さく, 葉数では多くなった。

開花 : 開花始めは被覆がおそい方がおくれる傾向を示したが, 被覆から開花までの日数では短くなっていった。定植期別の開花の早晩は被覆時期により異なった。10月11日, 20日の両被覆区では8月29日定植より9月5日定植の開花が早く, 10月30日被覆では8月29日定植の開花が早かった。

収量 : 平均収穫始めは開花始めが早いほど早まったが, 差は縮まった。No.2(9月5日定植, 10月11日被覆)とNo.4(9月5日定植, 10月20日被覆)が2月8日で最も早かった。

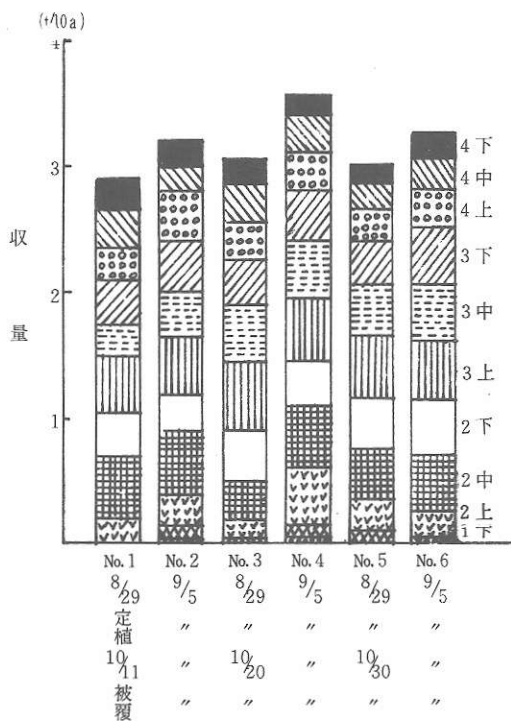


図1 10月被覆作型の時期別収量

また, 2月下旬までの初期収量はNo.4が最も多かった(1.47 t/10a)。4月下旬までの総収量もNo.4が最も多く3.54 t/10aであった。大果割合(17g以上)ではNo.3(8月29日定植, 10月20日被覆)が低かった(36.7%)ほかは大查なかった(41.6~43.7%)。

考察 : 被覆がおそい方がわい化は強く, また花数および花房数は各被覆とも9月5日定植区がまさった。このためにNo.4の初期および総収量が最も多かったものと思われる。なお, 麗紅は促成栽培としては全般に収穫始めがおそく, また初期収量が少なく, 低温期の着色不良もみられた。このことから初期の高温管理の徹底および越冬期の保温対策をはかる必要があると思われた。

2. 11月被覆作型

試験方法 : 被覆時期を11月10日, 20日, 30日の3回とした。10月被覆作型と同様に4.5 m間口, 奥行27 mのバ

イブハウスを用い、このハウスを3等分して3回の被覆時期に当てた。それぞれの被覆時期ごとに A.早期仮植-早期定植区(7月25日-9月5日)「9月5日定植区」 B.普通育苗区(8月17日-10月5日)「10月5日定植区」を設けた。保温はホカホカマット+ポリのトンネル被覆によつた(12月1日~3月25日)。二重カーテンは用いながつた。

試験結果

低温遭遇量：5℃以下の低温遭遇量は11月10日で96時間、20日で130時間、30日で194時間であつた。

生育：11月10日被覆はわい化が強く、草勢が劣つた。11月20日被覆でもややわい化し、11月30日被覆になつてわい化しなかつた。また、9月5日定植区は10月5日定植区より草勢はおう盛であつたが、後半両区の差は縮まつた。

開花：9月5日定植区の間では被覆時期がおそい方が頂花房の花数は多くなつた。しかし10月5日定植区の間ではこの傾向は認められなかつた。また10月5日定植区は9月5日定植区より開花がおくれた。

収量：収穫始めはNo.1(9月5日定植, 11月10日被覆)が2月5日以最も早かつた。3月31日までの初期収量は被覆が早い方が多く、また、9月5日定植区が10月5日定植区より初期収量が多かつた。後期収量は、11月20日、30日被覆が多くなつた。総収量ではNo.1が最も多収だつた。授粉はミツバチによつたが、二重カーテンを用いながつたために温度が確保できず、奇型果の割合が高くなつた(14.9~36.8%)。被覆がおそいほど奇型果が多い傾向になつたが、ハウスの向きが東西なので試験区の間で温度差が開いたことが影響していると思われる。また5月に入りうどんこ病の発生が著しかつた。

考察：11月10日被覆が初期収量、総収量ともに多収ですぐれた。ただし、この被覆では10月5日定植区の収量が低下しているので、この時期の被覆では早期仮植、

早期定植により株の充実をはかることが必要と思われる。従来の8月中旬仮植, 10月上旬定植の場合は11月20日被覆がすぐれた。

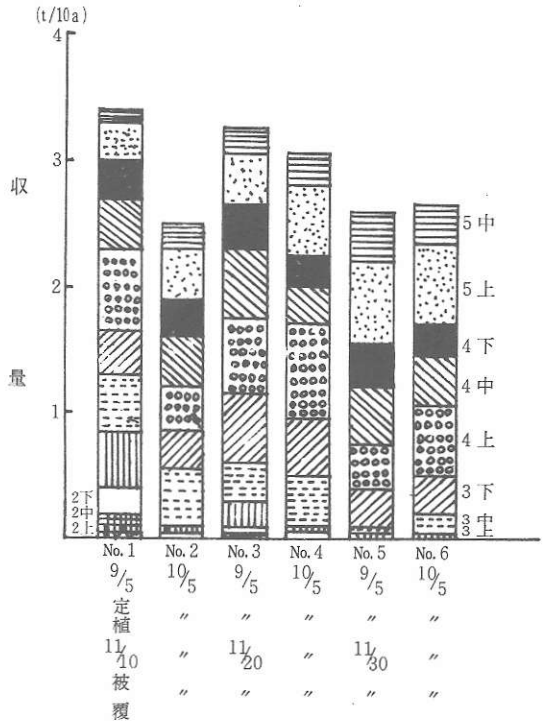


図2 11月被覆作型の時期別収量

なお、11月被覆ではトンネルだけでの保温では不足で二重カーテンが必要と思われる。

引用文献

- 1) 成川 昇・土岐知久. イチゴ「麗紅」の栽培法に関する試験(1) 保温開始期. 関東・東山地域野菜試験成績概要 108 (1977).